第７章 特論２　名和町における鉄生産

はじめに

名和町内における鉄生産関連の遺跡については、『鳥取県生産遺跡分布調査報告書』によると８遺跡（地点）が確認されている（註１）。これは日本海沿岸においては隣接する中山町についで多い。しかし大半が遺物（鉄滓など）の表面採集などであり、その時期など様相は不明瞭である。

その後名和町内でも発掘調査が増加し、それに伴い製鉄関連の遺物・遺構が見出されるようになってきた。本遺跡でも遺構こそ検出できなかったものの、平安時代の椀形鍛冶滓などが比較的まとまって出土した。そこでここに名和町内の資料を集成し、整理してみたいと思う。

１．名和乙ヶ谷遺跡出土の鉄関連遺物　(図36・37)

名和乙ヶ谷遺跡では、椀形鍛冶滓を主体とする鉄滓が32点出土した。それらは出土層位および形状などから、概ね平安時代初頭のものと判断した。今回は諸事情から金属学的な分析を行っておらず、表面上の観察からのみ検討をしている（註２）。

本調査地ではＦ３が唯一製錬滓の可能性をもつ。分析を待たなければ確かなことはいえないが、そうであるとすれば、近隣に製錬遺跡の存在を示す例として貴重な資料となる。後述するが、本遺跡から直線距離で2.5kmほど東にある上寺谷遺跡では、古代の製錬炉が検出されている。時期を示すものが少ないため明確にはいえないが、ほぼ同時期のものと考えられる。合わせて分析を行えば、具体的なデータを提示できる可能性があり、今後の重要課題となろう。

椀形鍛冶滓には大きく、扁平なものと３cm前後の厚みをもつ二種類がある。断面形は前者が皿状なのに対して、後者は椀状を呈する。これが工程差なのか、鍛冶炉の規模や炉底形状の違いなどによるものかは、分析結果を加味した上で検討する必要があるが、少なくとも１基の鍛冶炉から形成されたものではないことはいえよう。また二段の椀形鍛冶滓などもみられ、複数回の作業が行われた可能性も考えられる。

これら鉄滓・鉄製品の多くが、道５・６の周辺を中心とした調査地南側に密に分布する（図36）。このことから調査地南側の外に鉄関連施設が存在する可能性は高いのではなかろうか。また道埋土内からも数点ではあるが出土しており（Ｆ１～Ｆ７）、そうした鉄関連施設とこれら道は関係するものと考えたい。

２．名和町内の鉄関連遺跡　(図38)

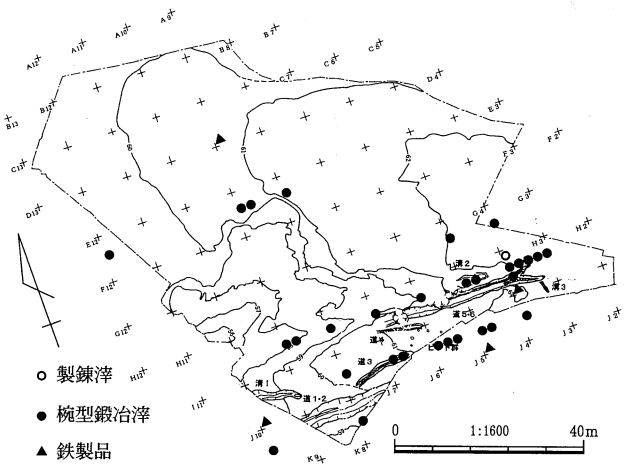


図36　製鉄関連遺物分布

名和町内でもっとも注目されるのは茶畑山道遺跡SK11から出土している鍛冶滓である。これは弥生中期後葉の土器に伴って出土しており、概ねその時期のものと考えられる（註３）。また同遺跡ではほぼ同時期の鉄斧も出土している（註４）。さらに蛇ノ川を隔てた茶畑第１遺跡でも中期末に比定される住居内から鉄鏃などが出土しており（註５）、古くからこの地域に鉄製品が普及していたことを物語っている。

古墳時代においては古墳や集落内から鉄製品が出土しているが、鍛冶関連遺物は出土していない。

古代に入り上寺谷遺跡において製鉄炉が検出され

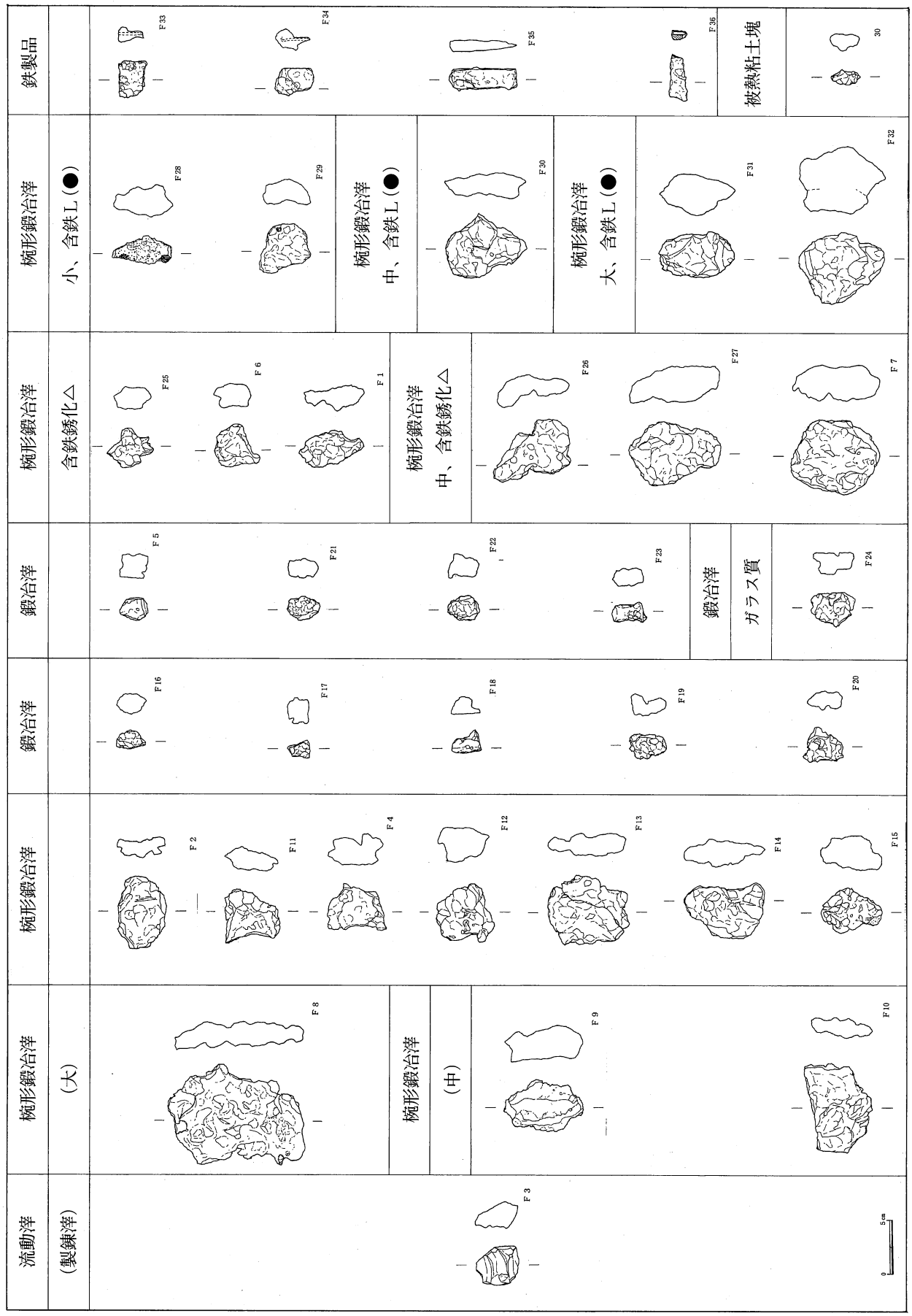
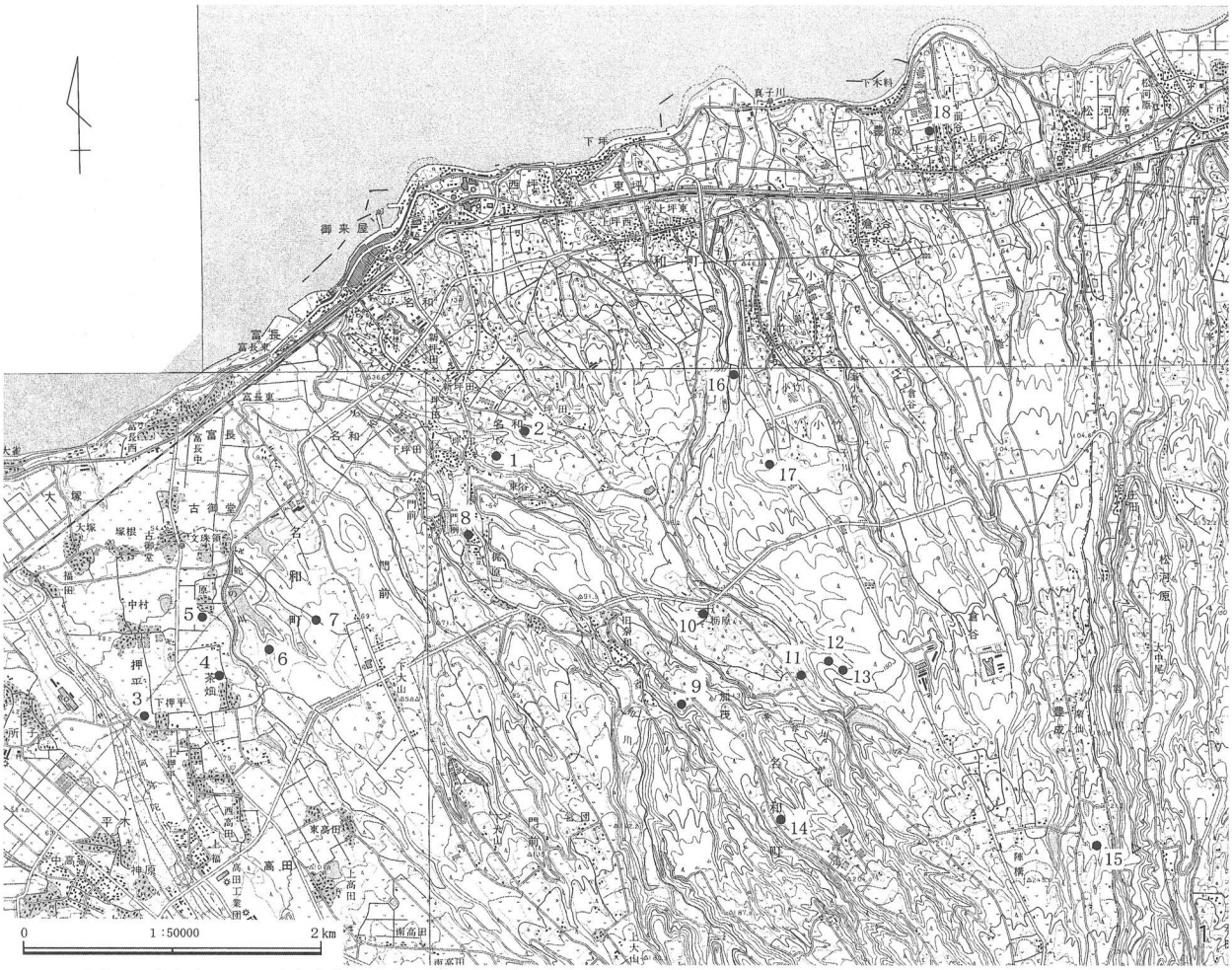
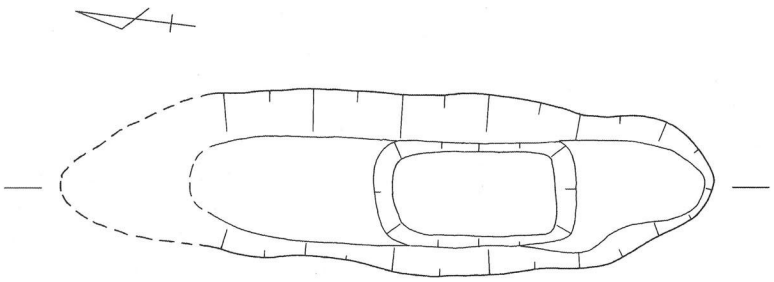
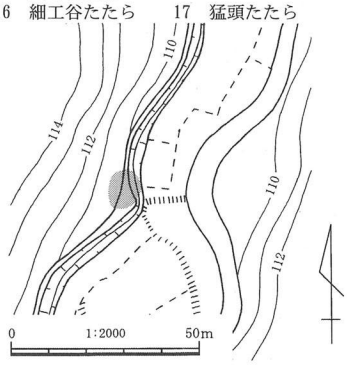


図37　製鉄関連遺物構成図

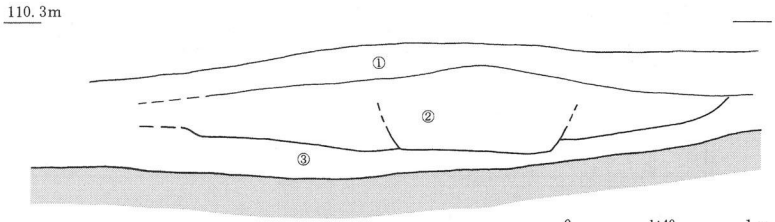


1　名和乙ヶ谷遺跡　2　名和衣装谷遺跡　3　押平弘法堂遺跡　4　茶畑六反田遺跡　5　茶畑山道遺跡　6　茶畑第１遺跡
7　古御堂笹尾山遺跡　8　門前第３遺跡　9　小倉谷たたら　10　栃原須恵器窯跡・たたら　11　上寺谷遺跡
12　東坪・田ノ免平北たたら　13　田ノ免平南たたら　14　渡り道たたら　15　楽仙たたら　16　細工谷たたら　17　猛頭たたら
18　浜ノ坂遺跡（天王地区）

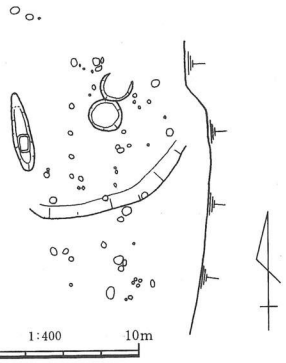




3　上寺谷遺跡位置



2　上寺谷遺跡製鉄炉　①　黄色土
②　炭と小鉄滓と赤い土
③　炭混じりの砂



4　上寺谷遺跡遺構分布

２～４は註６文献から加筆再トレース

図38　名和町内製鉄関連遺跡分布および遺構

ている（図38－2、註６）。狭い谷川沿いの丘陵裾部に位置し、ほぼ南北方向に長軸をとる船形を呈する。北側は削平されているが南北の残存長は約2.8m、幅が0.95m、深さ0.45mほどを測る。この東側３mほどのところに径約２mの土坑が２基「８字」状に連なっており、そこから多量の製錬滓が出土している。時期を示す遺物はわずかで、古代の土師器が出土していることから奈良時代あるいは古墳時代後期に遡る可能性が指摘されている（註７）。また角田徳幸氏は奈良～平安時代前半に比定している（註８）。さらにこの周辺１kmの範囲に６ヶ所のたたら跡があり（図38－1、９・12～16)、野だたらのあり方からほぼ同時期のものと推定されている（註９）。なおここには栃原須恵器窯跡がある。焚口から煙道まで約６m、18°の斜度をもち、煙道は奥壁から垂直に立ち上がる。しかしここからはわずか１点しか須恵器は出土しておらず（註10)、須恵器窯ではなく製鉄炉と関連する炭窯の可能性も考えられるのではなかろうか。

そしてここから直線距離で2.5kmほどの位置にあるのが名和乙ヶ谷遺跡である。ここから谷を隔てた北側に位置する名和衣装谷遺跡の例は、９世紀末～10世紀前半に位置づけられる。ここでは２×５間の大型掘立柱建物跡が２棟検出され、おそらく鉄滓もこれに関連するものと考えられている（註11)。その内容は椀形鍛冶滓が12点であるが、半数以上の７点（58.3%）が含鉄であるという特徴をもつ。その理由については判然としないが、これだけのまとまりには何らかの意味があろう。

また門前第３遺跡からは波板状凹凸面と考えられるピット列をもつ溝状遺構（第１溝状遺構、図39－５）が検出され、そこから須恵器片とともに椀形鍛冶滓が出土している（註12)。時期が遺構埋土から近世とされているが、遺跡内から近世の遺物は出土しておらず、近世とする根拠が不明瞭である（註13)。そのため古代に遡りうる可能性を指摘しておきたい。このほか名和神社近くに所在し、汗入郡衙跡と推定されている長者原遺跡からも鉄滓が出土していると報告されている（註14)。

鎌倉時代の集落跡である茶畑六反田遺跡・押平弘法堂遺跡から、多くの鉄製品と鍛冶関連遺物が出土している（註15)。両遺跡は同一台地上に立地し、その距離は500mほどであることから、同一集落と考えられる。どちらからもまとまって鎌や鑿、刀子などの工具類や紡錘車、鉄鍋などの生活用具類、金具類などヴァリエーションに富む製品がある。ただ八峠興氏が指摘しているように、鎌を除いて農具がないことが本遺跡における特徴といえよう（註16)。またこれらに伴い鍛冶関連遺物も出土している。しかし、台地西側に位置する押平弘法堂遺跡では茶畑六反田遺跡に比べ椀形鍛冶滓などの出土量は多い。比較するにはわずかな量ではあるが、前者の椀形鍛冶滓は後者に比べやや厚みをもつものが多く、また四段気味のものがあるなどの違いが見出せる。このことは押平弘法堂遺跡のほうが、操業回数が多かったことを示す可能性が考えられようか。

このほか浜ノ坂遺跡（天王地区、註17）では、方形の周溝に区画された区域から鍛冶滓が多量に出土したとされ、鍛冶遺構と推定されている（註18)。８世紀前後の須恵器杯・蓋や土師器甕が出土しているが、13世紀頃の瓦質鍋などもあり、その時期は不明である。報告書では奈良時代に比定しているが、中世に下がる可能性は十分考えられよう。

近世以降についてはまったく不明である。

おわりに

以上名和町内の資料について概観してきた。弥生時代中期の鍛冶滓や古代の製鉄炉があるなど、資料数は少ないが山陰地方において非常に重要なデータをもつ地域であることがわかってきた。遺構が検出されなくとも、鉄滓などの遺物から得られる成果は大きい。とくに考古学的な表面観察に加え、金属学的な分析を行うことでより資料の特徴が把握できる。こうした検討をひとつひとつ積み重ねていくことで、鉄生産の地域的な様相をつかんでいきたいと考える。

最後になりましたが、今回名和乙ヶ谷遺跡出土資料を中心に、種々御指導いただいた穴澤義功氏、および名和町内の資料検索、実見に際し多くのご教示を賜った辻信広氏に心より感謝いたします。

（中森）

（註）1．清水真一編　1984『鳥取県生産遺跡分布調査報告書』鳥取県教育委員会
2．穴澤義功氏の指導の下、中森が行った。観察表は第５章末に掲載している。なお将来的に金属学的分析を行う可能性を考えて資料を７点抽出し、それらについては分析用の観察所見を載せている。
3．辻　信広編　2003『押平弘法堂遺跡・押平天王屋敷遺跡・茶畑山道遺跡』名和町教育委員会
4．辻　信広編　1999『茶畑山道遺跡』名和町教育委員会
5．西川　徹・日置　智編　2003『茶畑第1遺跡概報』鳥取県教育文化財団
6．富長源十郎編　1984『名和町遺跡発掘調査報告書』名和町教育委員会
7．註１、pp.121～122
8．角田徳幸　1999「山陰における古代・中世の鉄生産」『地域に根ざして』田中義昭先生退官記念事業会
9．註１、p.122
10．富長源十郎　1978『栃原遺跡発掘調査報告書』名和町教育委員会
11．八峠　興・湯川善一編　2003『名和衣装谷遺跡・古御堂金蔵ヶ平遺跡』鳥取県教育文化財団
12．須山加奈子編　1998『門前第３遺跡』名和町教育委員会
13．名和町教育委員会のご好意により遺物を実見させていただいた。
14．富長源十郎　1994『角塚遺跡・長者原遺跡発掘調査報告書』名和町教育委員会
15．八峠　興ほか編　2002『茶畑六反田遺跡・押平弘法堂遺跡・富岡播磨洞遺跡・安原溝尻遺跡』鳥取県教育文化財団
16．同上、P.139
17．註１文献では「金山エゴ遺跡」とされている。
18．富長源十郎編　1978『名和遺跡群発掘調査報告書』名和町教育委員会
出土遺物を実見したが、未洗浄のものも多く詳細は不明瞭ながら鍛冶滓で占められていた。

＜特論３文献＞

1．濵田竜彦ほか編　1997『陰田第６遺跡、陰田宮ノ谷遺跡３区・４区』米子市教育文化事業団
2．高橋浩樹編　2003『吉谷亀尾ノ上遺跡、橋本徳道西遺跡第１次～第３次調査』米子市教育文化事業団
3．下江健太・伊藤　創編　2003『橋本漆原山遺跡、橋本徳道遺跡』鳥取県教育文化財団
4．湯村　功ほか編　1997『天萬土井前遺跡』鳥取県教育文化財団
5．西川　徹・高尾浩司編　1998『御内谷遺跡群』鳥取県教育文化財団
6．吾郷信一編　1998『北方廣畑遺跡』西伯町教育委員会
7．須山加奈子編　1998『門前第３遺跡発掘調査報告書』名和町教育委員会
8．西尾秀道編　1997『住吉遺跡群』中山町教育委員会
9．門脇豊文編　2001『福留遺跡発掘調査報告書』赤碕町教育委員会
10．八峠　興・岡野雅則編　2000『島古墳群、米里三ノ嵜遺跡、北尾釜谷遺跡』鳥取県教育文化財団
11．加藤誠司編　1998『後口山遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会
12．根鈴智津子・岡平拓也編　1998『向野遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会
13．名越　勉ほか編　1977『宮ノ下遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会
14．米田規人ほか編　1992『宇谷第１遺跡、南谷大ナル遺跡』鳥取県教育文化財団
15．牧本哲雄ほか編　1998『小浜ワラ畑遺跡、小浜小谷遺跡、池ノ谷第２遺跡』鳥取県教育文化財団
16．谷岡陽一編　2000『上野古道遺跡発掘調査報告書』福部村教育委員会

第７章 特論３　鳥取県における道路状遺構について

はじめに

今回名和乙ヶ谷遺跡では、平安時代初頭および近世の道路状遺構をまとまって検出した。そしてその形態にはいくつかのヴァリエーションがあった。そこで鳥取県内の資料を集成するとともに、若干の比較・検討を試みる。

１．形態的特徴

分類は形態的に以下のように設定した。

Ⅰ類：溝状遺構にピット列が伴うもの。このピットの形状により、さらに細分される。

ａ類：ピットの平面形が円ないし楕円を呈し、列状に並ぶもの。

ｂ類：ピットの平面形が溝状に長いもの。

ｃ類：円形ピットが不規則にあるもの。

Ⅰ′類：ピットのみが検出されているもの。削平により溝上場がないものも含まれる。

Ⅱ類：溝状遺構底面が硬化、あるいは床面上の堆積土が硬くしまっているもの。

Ⅱ′類：溝状の掘り込みがなく、硬化面が検出されているもの。削平により溝上場がないものも含む。

Ⅲ類：石（礫）敷き。

県内における道路状遺構およびそれに類すると思われるものは、管見に触れた限りでは20遺跡39例であった（表17）。これらを上記分類に従ってみてみると、Ⅰ・Ⅰ′類26例（66.7％）、Ⅱ・Ⅱ′類９例（23.1％）、Ⅲ類２例（5.1％）と、Ⅰ・Ⅰ′類が圧倒的である。その中でｃ類はわずかに１例（名和乙ヶ谷遺跡道７）で、ａ類16例（61.5％）、ｂ類９例（34.6％）となる。

ａ類におけるピットの法量をみてみると、径が0.3～0.4mのものが多く、深さは0.1m以下のものと0.2mほどのやや深いものの２種がある。ピット平面形には円形や楕円形、また２基が繋がったような瓢箪形もある。瓢箪形は福留第１遺跡第１道路状遺構（図38－４）や北方廣畑遺跡で検出されている。これが１度に掘られたものなのか、切り合いによるものかは、ピットの断面図が示されていないため不明確である。そしてこれらピットの心々間を測ると、大半が0.6～0.7mの間に納まる。その中で名和乙ヶ谷遺跡のものは、0.5～0.6mとやや距離が狭い。

一方ｂ類では、長さが１～２m、幅0.2～0.6mのものが大半を占める。また深さは0.1m前後のものが多く、ａ類に比べ浅い傾向があるといえようか。これらの心々間は0.6～0.7mで、ａ類とほぼ同じであった。

２．時期

時代は弥生時代後期から古墳時代後期の間とされる南谷大ナル遺跡ＳＤ01例がもっとも古く、近世後期以降の上野古道や名和乙ヶ谷遺跡道７まで時期幅はある。しかしこの中で、奈良～平安時代に属するとされるものが17例（43.6％、ただし「？」付きのものを含む）と、約半数を占めることはひとつの特徴に挙げられよう。また近世以降が11例（28.2％）と続く。

これを形態別でみると、Ⅰ・Ⅰ′ａ類は古代以前では12例、近世以降は３例に対し、Ⅰ・Ⅰ′ｂ類は古代２、平安後期から鎌倉３、近世以降１例と、ａ類に比べ新しい傾向が窺える。とくに古代においてａ類が卓越することは、これが初現的なタイプであることを示すのであろうか。またⅡ類については古代・近世ともに３例で、最古の例である南谷大ナル遺跡例も本例に属す。

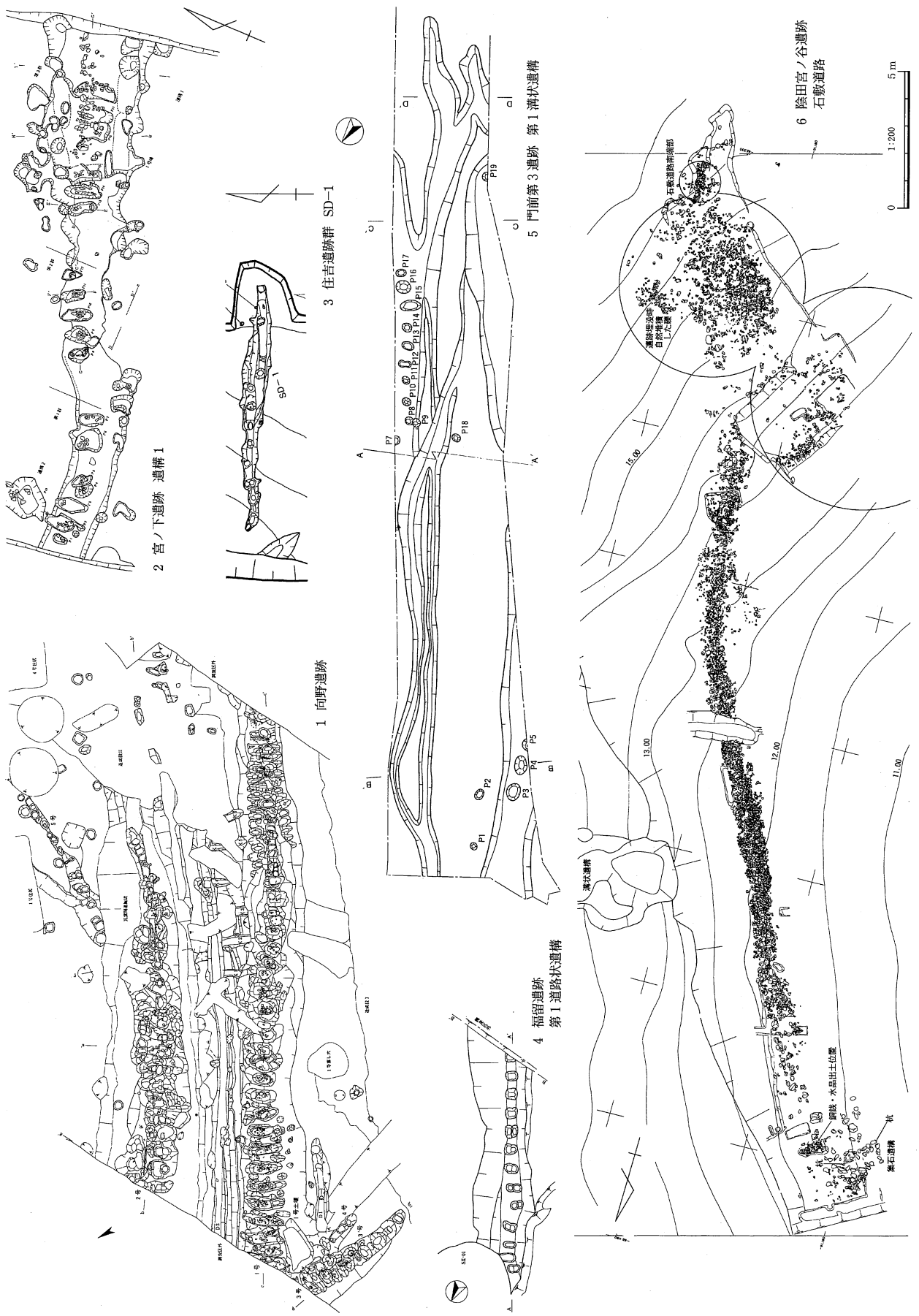


図39　鳥取県内の道路状遺構

おわりに

以上甚だ簡単に道路状遺構について概観してきた。時期的には、奈良～平安時代とされるものが大半を占める。ただし、道路状遺構から時期を判断しうる良好な遺物が出土することは少なく、遺物からの時期決定はなかなか難しい。そのため時期不明であったり、かなり曖昧な報告も多い。やはり遺物に頼らず、遺構との切り合いや埋土の検討によって判断していくことが求められよう。

次にⅠ類の検出例が多いことはピットの連続などにより、認識しやすいことが挙げられる。一方Ⅱ類においては、池ノ谷第２遺跡SD 02のように溝底面に硬化面が検出されていないものでも、床面上の堆積土が硬くしまっていることなど堆積状況の検討によって、道である可能性を指摘することはできよう。

一方、波板状凹凸面とされるピット群についてはその機能について諸説あり、未だ説得力のある説はないようである。ただ向野遺跡例（図38－１）のように、同一地点を数度にわたり掘り返していることは、路床基礎工事などに伴う行為ともとれよう。

今回は県内資料の集成、および分類をするにとどまった。今後はこれまで成されてきている多くの研究成果を基に、検討を加えていきたい。

最後に伊藤　創、高橋浩樹、山村信榮の各氏には本稿を成すにあたり多くのご教示をいただいた。記して感謝いたします。

（中森）

表17　鳥取県内の道路状遺構一覧

番号	遺跡名	所在地	遺構名	分類	時期	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	報告	備考
1	名和乙ヶ谷遺跡	名和町名和	道１	Ⅱ	平安初	10.5	*3.0	－		
			道２	Ⅱ	平安初	20.6	4.4	1.0		
			道３	Ⅰａ	平安初	14.0	1.5	0.3		
			道４	Ⅱ	平安初	10.5	1.0	0.2		
			道５	Ⅰａ	平安初	18.0	0.8	0.4		
			道６	Ⅰａ	平安初	9.1	1.1	0.4		
			道７	Ⅰｃ	近世後期	46.0	6.0	1.0		
2	陰田宮ノ谷遺跡	米子市陰田	石敷道路	Ⅲ	７～８ｃ	40.5	1.2	－	1	
3	橋本徳道西遺跡	米子市橋本	SF－01	Ⅰｂ	７c末～８c初以降	39.4	2.7	0.4	2	
			SF－02	Ⅰｂ	？	17.8	1.8	0.3		SF－01に切られる
			SF－03	Ⅰ′ｂ	？	4.5	△0.8	－		
			SF－04	Ⅰｂ	？	39.0	2.8	0.4		SF－01･02に切られる
4	橋本徳道遺跡	米子市橋本	道路状遺構１	Ⅱ′	近世以降	7.2	1.0	－	3	２条の硬化面
			道路状遺構２	Ⅱ′	近世以降	28.8	3.0	－		〃
5	橋本漆原山遺跡	米子市橋本	道路状遺構１	Ⅱ	近世以降	20.0	2.0	0.1		
			波板状凹凸面１	Ⅰ′ａ	17ｃ以降	3.0	0.4	－		
			ピット列１	Ⅰ′ａ	近世以降	4.8	△0.6	－		
			ピット列２	Ⅰ′ａ	近世以降	6.2	△0.8	－		道路状遺構１と関連か
6	天萬土井前遺跡	会見町天萬	SC01	－	近世後期	24.0	3.0	－	4	２条の側溝
7	金田堂ノ脇遺跡	会見町金田	SS－01	Ⅰｂ	近世後期	15.8	2.5	0.6	5	
8	御内谷向田遺跡	会見町御内谷	SC－01	－	17ｃ前半	42.0	1.9	－		２条の側溝
9	北方廣畑遺跡	西伯町北方	階段状不明遺構	Ⅰａ	７～８ｃ？	6.5	2.5	0.6	6	
10	門前第３遺跡	名和町門前	第１溝状遺構	Ⅰａ	古代？	11.0	△1.0	0.2	7	
11	住吉遺跡群	中山町住吉	ASD－１	Ⅰａ	古墳時代？	8.8	1.0	0.2	8	
12	福留遺跡	赤碕町福留	第１道路状遺構	Ⅰａ	８ｃ後半？	9.8	2.2	0.8	9	
			第２道路状遺構	Ⅰａ	８ｃ後半？	3.6	△1.5	0.2		
13	北尾釜谷遺跡	北条町北尾	畝状遺構１	Ⅰ′ｂ	平安後半～鎌倉？	9.2	△2.7	－	10	同方向にSA１が伴うか？
			畝状遺構２	Ⅰ′ｂ	平安後半～鎌倉？	6.2	△2.5	－		
14	後口山遺跡	倉吉市桜	１号道状遺構	Ⅰａ	？	5.2	3.0	0.3	11	
15	向野遺跡	倉吉市大谷	１号溝状遺構	Ⅰｂ	国庁第３段階	21.0	2.4	0.5	12	
			２号溝状遺構	Ⅰａ	国庁第２段階	13.5	－	－		
			３号溝状遺構	Ⅰａ	国庁第３段階	4.5	1.6	－		
			４号溝状遺構	Ⅰａ	国庁第２段階	2.2	1.0	－		
			５号溝状遺構	Ⅰａ	国庁第２段階	6.0	1.0	－		
16	宮ノ下遺跡	倉吉市国府	遺構１	Ⅰｂ	鎌倉時代以降		3.5	0.6	13	
17	南谷大ナル遺跡	羽合町南谷	SD01	Ⅱ	弥生後期後半～古墳後期後半	6.1	1.0	0.2	14	
18	小浜小谷遺跡	泊村小浜	SD01	Ⅱ？	？	19.0	1.4	0.1	15	
19	池ノ谷第２遺跡	泊村池ノ谷	SD02	Ⅱ？	？	99.2	1.5	0.4		
20	上野古道遺跡	福部村左近	石畳遺構	Ⅲ	近世後期以降	42.0	1.0	－	16	

「長さ」は検出された長さ、幅は溝の最大幅を示す。＊は復元、△は残存値。深さは計測可能のもののみ示した。

第８章　まとめ

調査地周辺には名和町町名の由来ともなる、名和氏に関わるとされる史跡などが多い。とくに調査地のある丘陵先端部には、名和氏一族郎党の墓といわれる五輪塔群が存在する。そのため調査前にはそうした時期の遺物・遺構が出てくることを想定していたが、結果として皆無に近かった。

今回の調査では比較的平坦な丘陵上に展開する遺構群を検出した。その中心となる時期は平安時代初頭で、尾根と並行する道路状遺構、そしてそれと関連するであろう鉄滓などの鉄関連遺物があった。道路状遺構にはいくつかの種類があり、所謂波板状凹凸面をもつものもみられた。本報告では鳥取県内の資料を集成するにとどまったが、まだ県内においてはそれほど多く検出されておらず、かつ検討も行われてきていない遺構である。本調査地においては、道１・２や道５・６など短期間のうちにつくりかえられたものもあり、比較的頻繁に利用されていたことが窺える。そして鉄滓の分布が調査地の南側、すなわち道路状遺構がまとまって検出された地域に集中する（図36）ことから、これら道は鉄生産と関連してつくられたものと推測した。

一方鉄生産については、本調査地内から鍛冶炉などの遺構が検出されず、鉄滓のみの出土であったためその様相を明確にはしえなかったが、鉄滓の分類などからその内容を検討した。そして製錬滓の存在から周辺地域に製鉄炉があること、それが調査地から2.5kmほど東に位置する上寺谷遺跡である可能性を指摘した。しかしこれについては鉄滓の金属学的分析による裏付けが必要であることは言うを待たない。また今回名和町内における鉄関連遺物出土遺跡を中心として、集成し検討を行った。古代以降全国でも有数の鉄生産地である鳥取県においては、これまで鉄生産についてあまり考究されてきていない。鍛冶炉などの施設の調査があまりない現状では、鉄滓などの遺物を考古学的に分類し、合わせて金属学的分析を行うことで、鉄生産の様相を探っていくしかない。少しずつではあるがこうした試みがなされてきており、今後の資料の蓄積とともに、検討が求められよう。

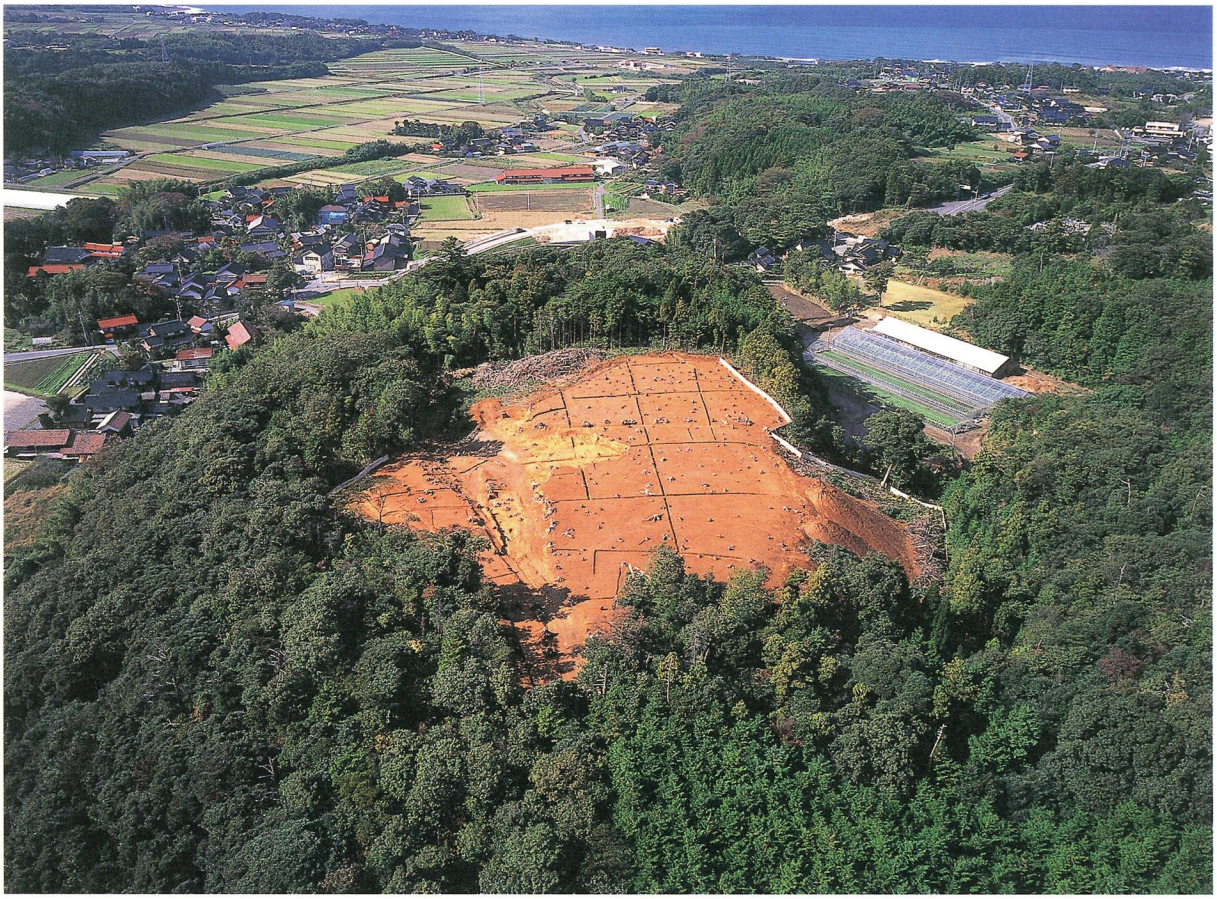
今回はこのほかに、縄文時代の土坑群などや遺物があったほか、近世後期の土採取跡と考えられる窪地などを検出した。広い調査地に比べ遺構の密度や遺物量は少なかったが、縄文時代から平安、そして近世・近代という変遷を追う資料を提示することができたと考える。これが地域における歴史復元の一助となれば幸いである。なお、今年度名和調査事務所では、６月から毎月「広報なわ」において発掘調査成果に関するコラムを連載させていただいた。来年度以降も継続し、地域に対する普及活動を行っていきたいと考えている。

現地調査から報告書作成まで、地元の方々を含め、大変多くの方々からご教示・ご協力いただいた。記して感謝いたします。

（中森・淺田）

図　　版

１　調査地遠景（調査後、南西から）



２　調査地遠景（調査後、東から）

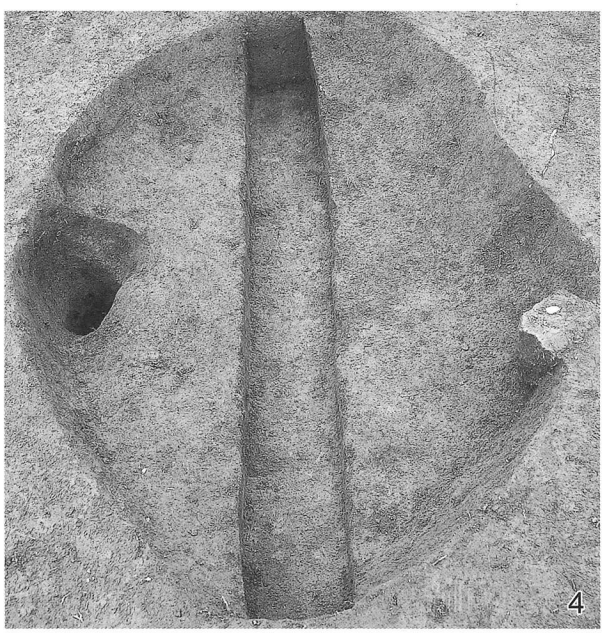
カラー図版２

道５～７完掘状況（東から）

１　調査地遠景（調査前、南から）

２　調査地遠景（調査前、東から）

図版 2



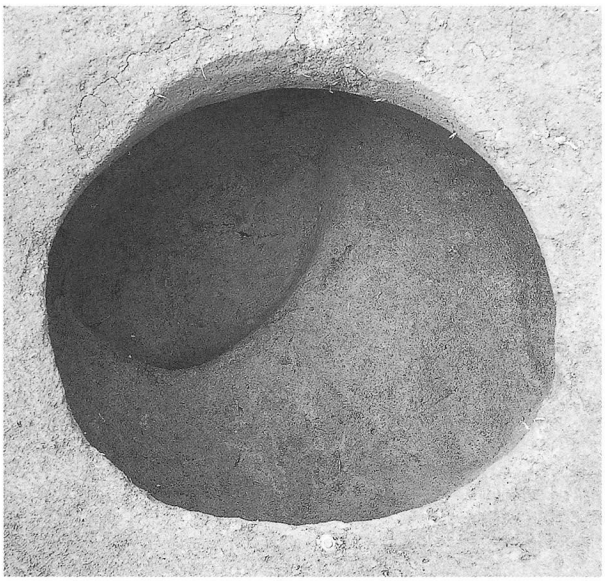
1　土坑 5 完掘（南東から）
2　土坑 8 完掘（南東から）
3　土坑 6 完掘（南西から）
4　土坑 7 完掘（西北から）

5　土坑群完掘状況（西から）

1　土坑１完掘（南から）

2　土坑２完掘（西北から）

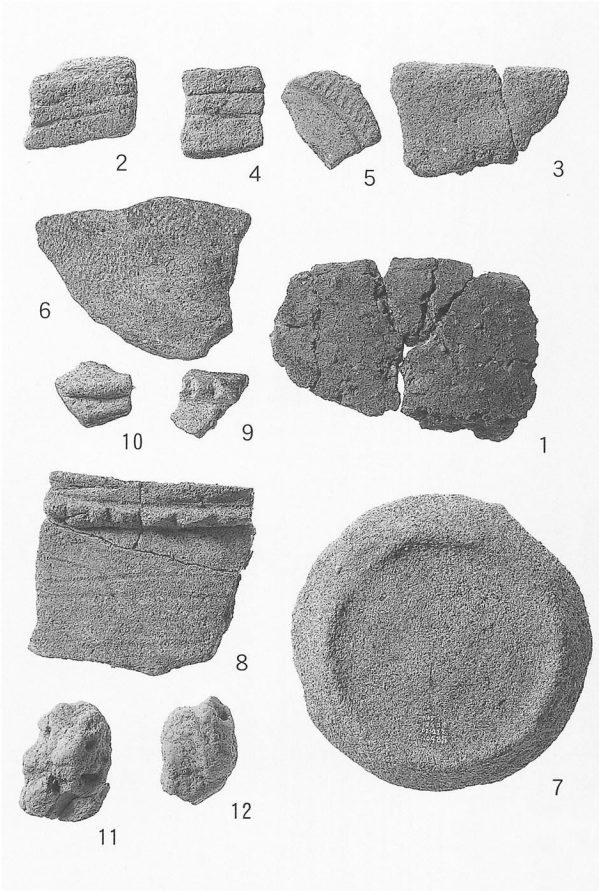
3　土坑10完掘（東から）



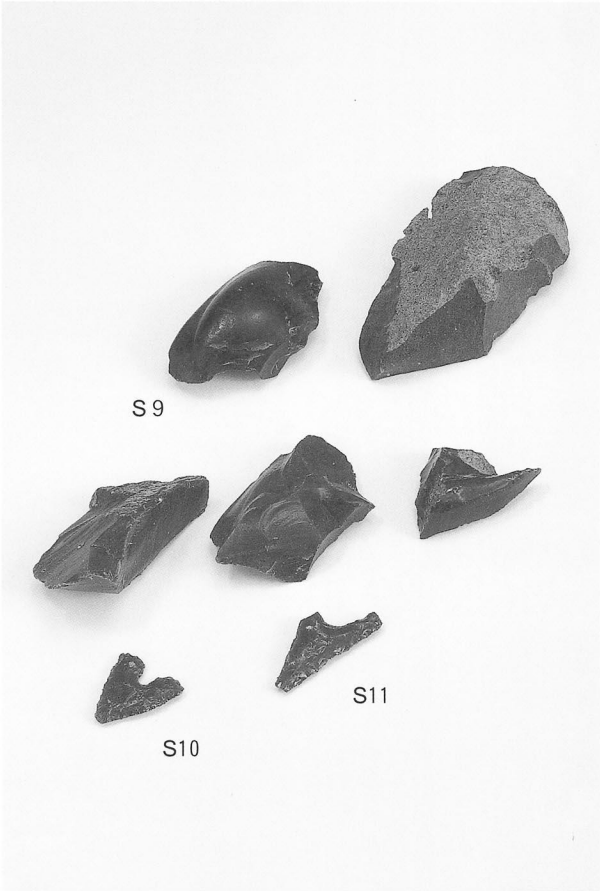
4　土坑11、Ｐ１完掘（東から）

5　土坑11完掘（西から）

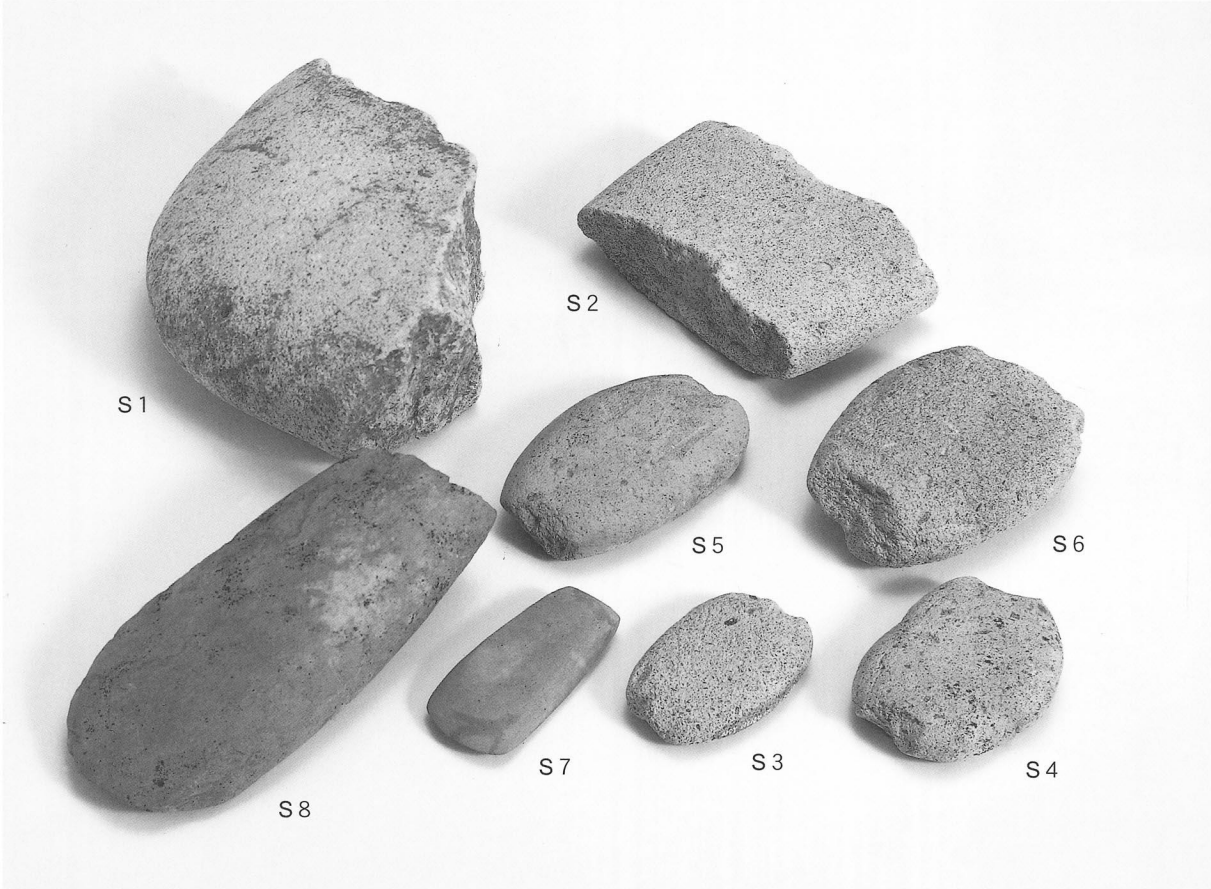
図版４



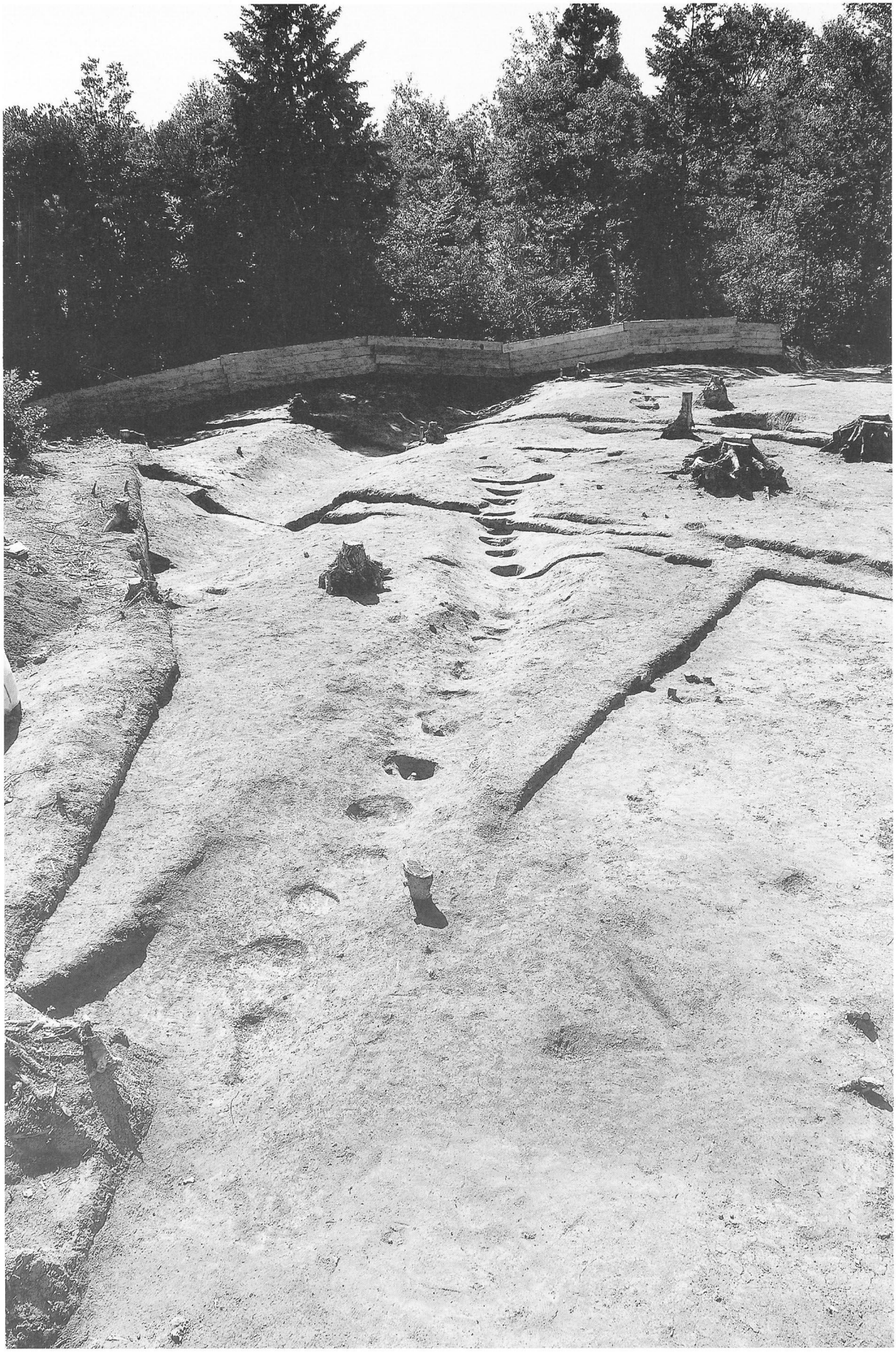
1　縄文時代後～晩期土器



2　黒曜石

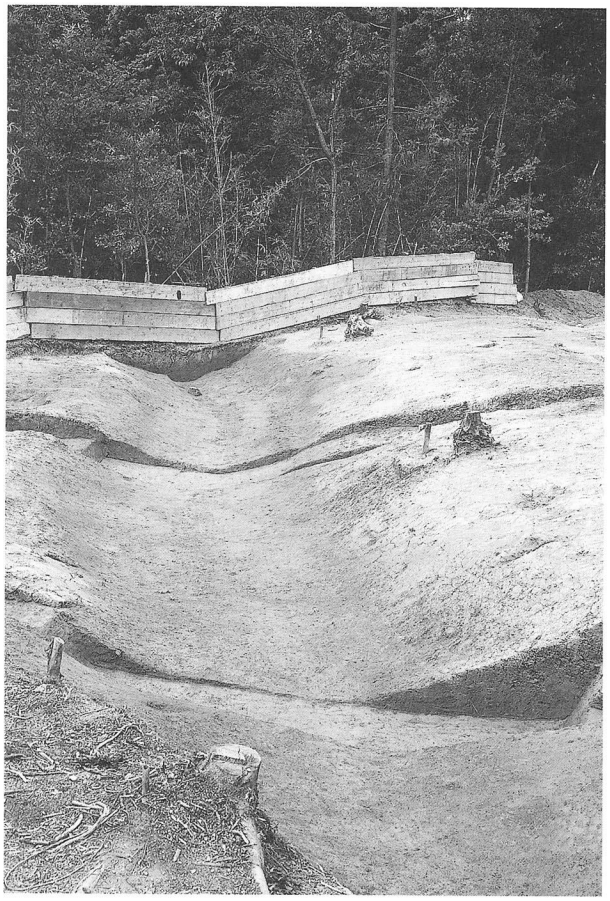


3　縄文時代石製品

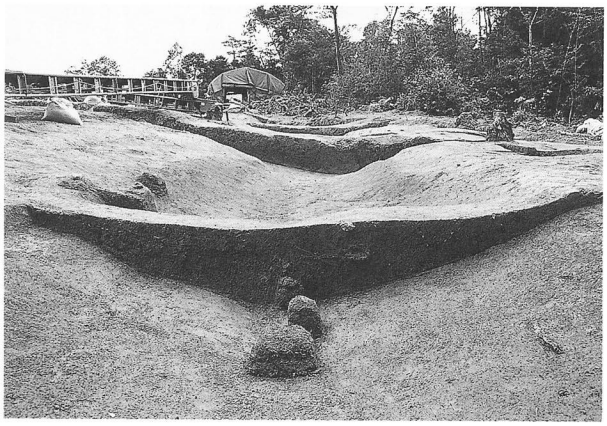


道１～３完掘（北東から）

図版６



1　道１・２完掘（西から）



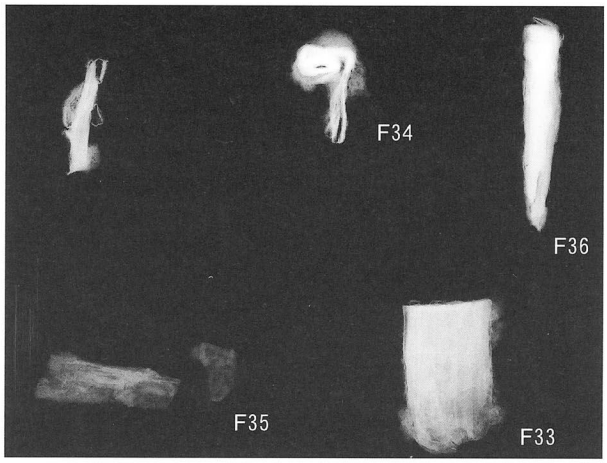
2　道１・２断面（東から）

3　道３断面（南東から）

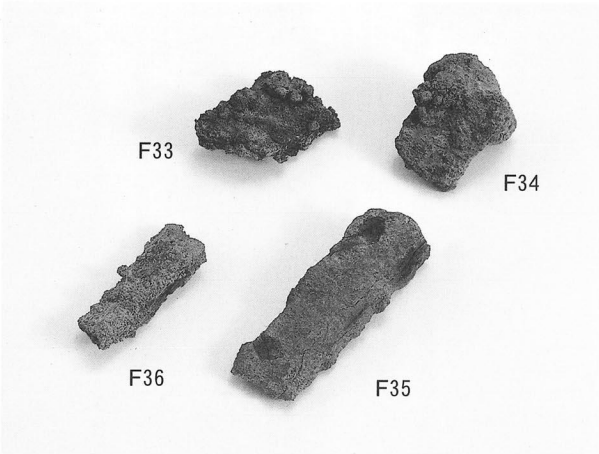
4　道５・６出土遺物

5　遺構外出土遺物

6　道３波板状凹凸面半裁状況（北東から）



1　鉄製品Ｘ線写真



2　調査地内出土鉄製品

3　調査地内出土製鉄関連遺物

図版８

1　窪地完掘（南から）

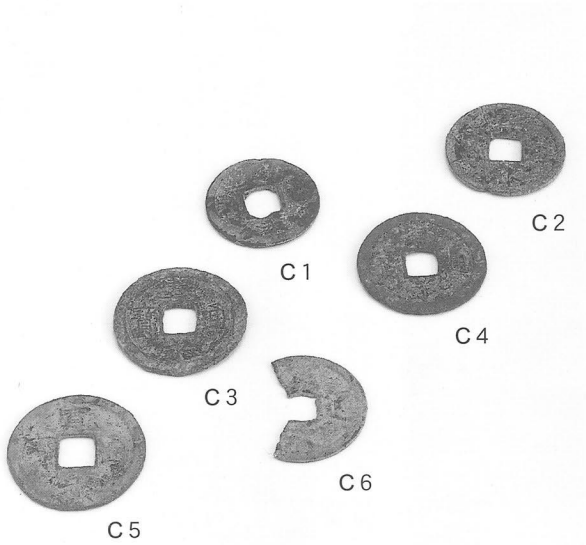
2　窪地内土層断面（C－C′西側、北西から）

3　窪地内土層断面（C－C′東側、南から）

4　窪地完掘（西から）

1　窪地内出土遺物

3　テラス４（南から）

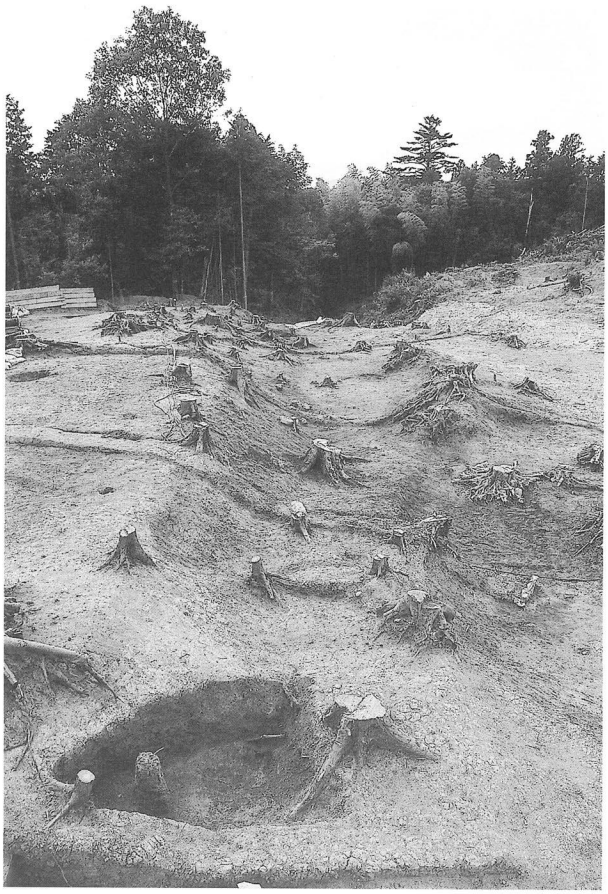


2　調査地内出土銭貨

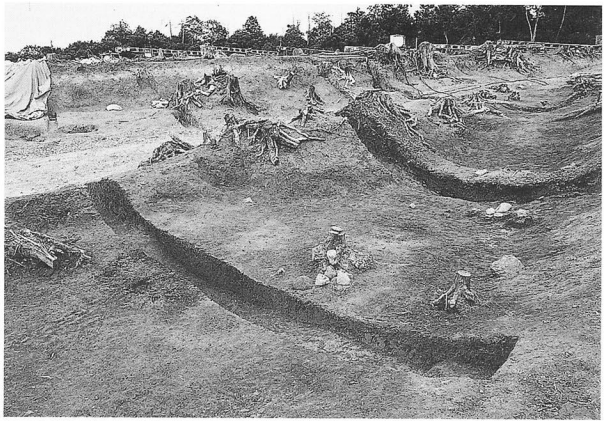
4　テラス１・２（南西から）

5　窪地内トレンチ設置状況（南から）

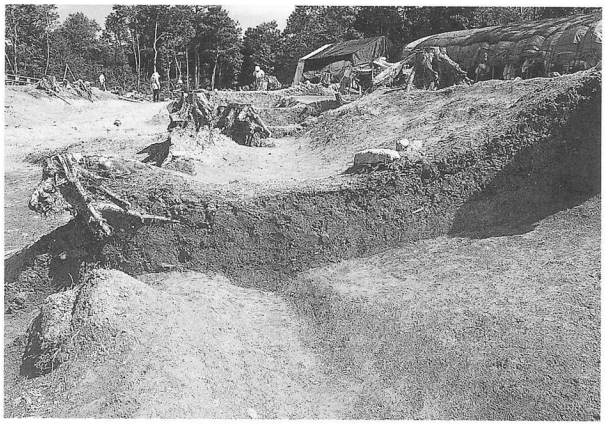
図版10



1　道７検出状況（東から）



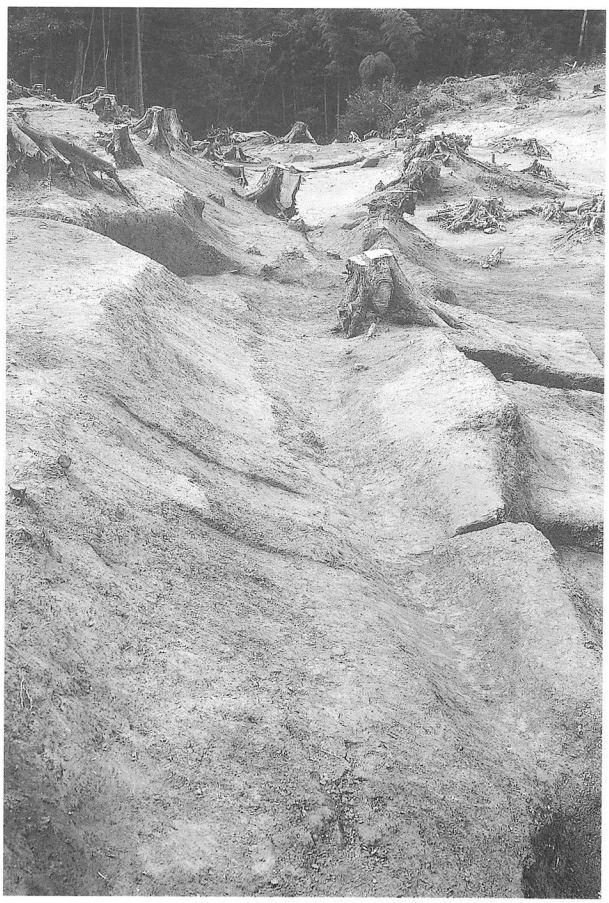
4　土塁３断面（南西から）



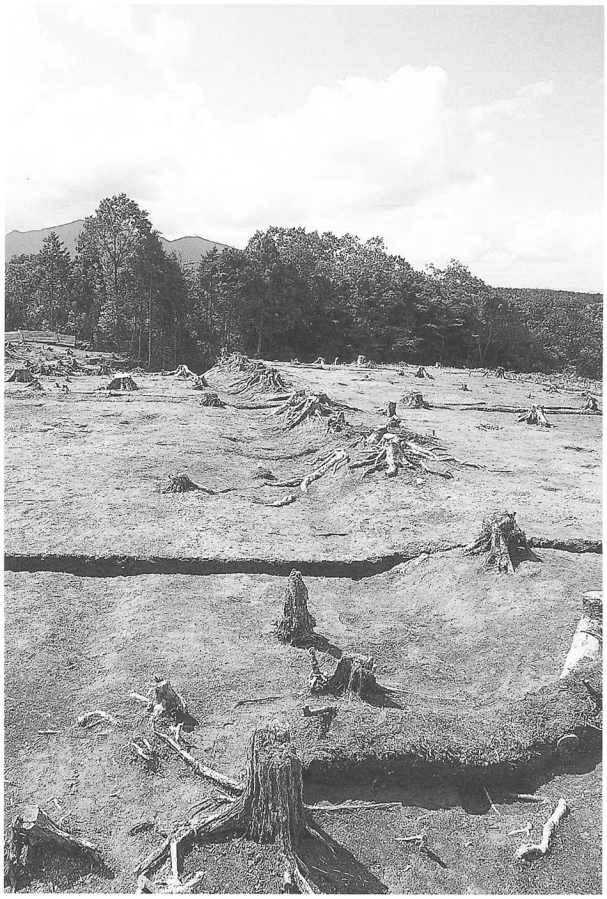
5　道７断面（西から）

2　道７、テラス６（南東から）

3　道７波板状凹凸面完掘（北西から）

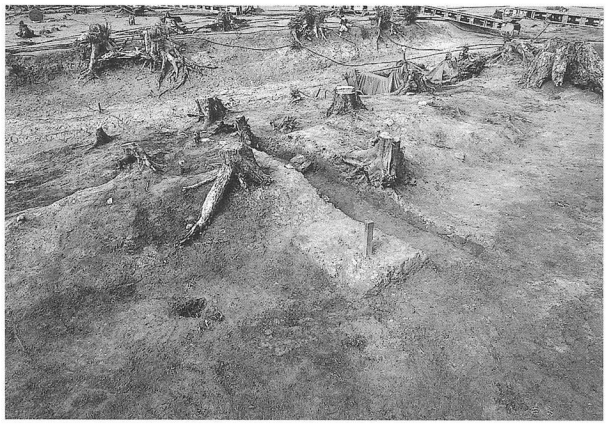


6　道７完掘（東から）



1　土塁１検出状況（北から）

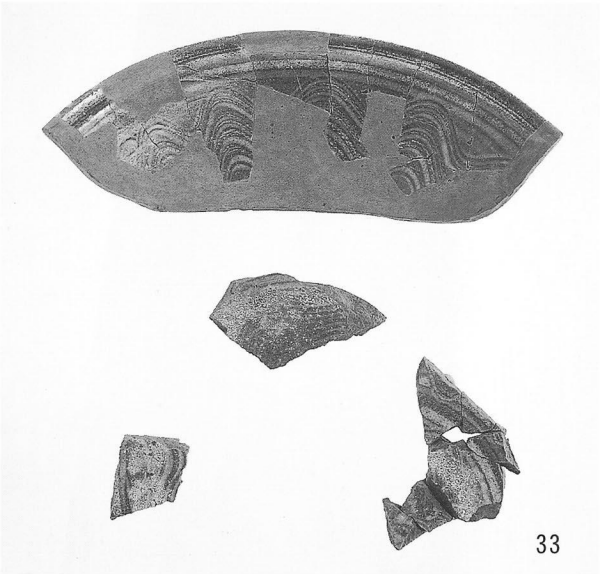
2　溝４、土塁１断面（南から）



3　土塁２検出状況（西から）

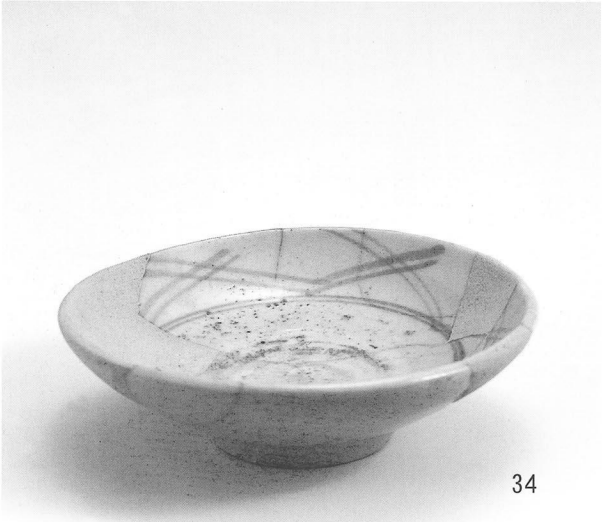
4　溝４完掘（南西から）

5　土坑12完掘（東から）



6　土坑12出土遺物

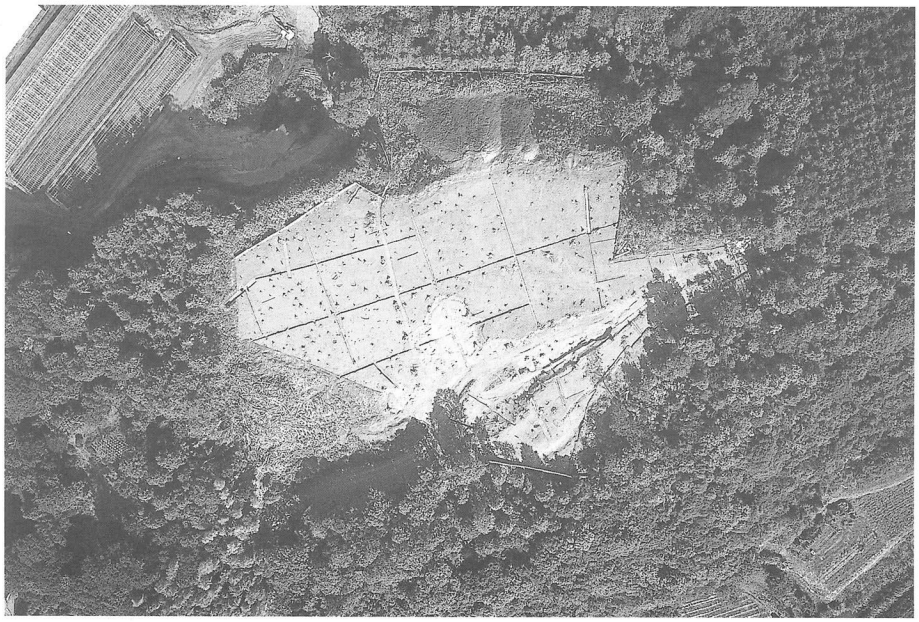
図版12



1　遺構外出土肥前系磁器

2　遺構外出土土玉

3　集石検出状況（南から）



4　調査地遠景（調査後）

報 告 書 抄 録

ふりがな	なわおとがたにいせき
書名	名和乙ヶ谷遺跡
副書名	一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	V
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書
シリーズ番号	83
編著者名	中森　祥、淺田康行
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団　鳥取県埋蔵文化財センター
所在地	〒680－0151　鳥取県岩美郡国府町宮下1260番地　　TEL（0857）27－6711
発行年月日	西暦2003（平成14）年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
名和乙ヶ谷遺跡（なわおとがたにいせき）	名和町大字名和字乙ヶ谷1165-1ほか字東穴田1176-1（なわちょうおおあざなわあざおとがたにあざひがしあなだ）	31387	306	36°29′47″	135°10′28″	20020401～20021110	7000㎡	一般国道９号（名和淀江道路）の改築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
名和乙ヶ谷遺跡	集落	縄文時代　後期～晩期	土坑 11	縄文土器、石器	
	集落	平安時代　初頭	道　6 溝　3	土師器　須恵器　鉄製品 製鉄関連遺物	
	集落	近世	道　1 窪地１ 土墨２ 集石１	土師器　銭貨 陶磁器	調査地周辺に鉄製品生産施設

鳥取県教育文化財団調査報告書 83
一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ
鳥取県西伯郡名和町

名和乙ヶ谷遺跡

発　行　2003年３月31日
編　集　財団法人　鳥取県教育文化財団
鳥取県埋蔵文化財センター
〒680-0151　鳥取県岩美郡国府町宮下1260
電話（0857）27－6711
発行者　財団法人　鳥取県教育文化財団
印　刷　綜合印刷出版株式会社